〔特別講演〕

ＵＦＯと円了妖怪学

*東洋大学　ライフデザイン学部　　菊　地　章　太†

UFO and the Enryo Mystery Studies

Noritaka KIKUCHI, Faculty of Human Life Design, Toyo University

１．哲学者がなぜ妖怪学？

最近は大学でも創設者の教育理念を見直し，それを教育の場にも反映させていこうとする動きがさかんになってきた．東洋大学の学祖井上円了は哲学者である．明治二十年（1887）に哲学館を創設した．ものの考え方の基礎となる哲学を教えるための学校である．明治時代に創設された私立学校は，早稲田の東京専門学校や中央の英吉利法律学校などすべて実学中心である．実学とはほど遠い純粋な人文学を教える私立学校は，そのころは哲学館だけであった．

哲学者の円了は，あろうことか妖怪の研究にも取り組み，哲学館で「妖怪学」という講義を行なった．専門である哲学の本が読まれることは今ではほとんどなくなってしまったが，妖怪学の方は新しい全集まで出版されており，宗教学や民俗学に関心をいだく人々にとって今も参照される文献になっている [1]．水木しげるさんも妖怪漫画を書くとき一番頼りにしている本だという．

明治二十年創設当初の哲学館科目表が残っている [2]．そこには，哲学や倫理学とならんで妖怪学という科目がある．なぜ円了は妖怪の研究などにこころざしたのか．

河童や座敷ワラシなど迷信にすぎない．そんな迷信に惑わされてはいけない．迷信ばかりではない．思い込みや偏見にとらわれることなく，自分の目で確かめ，自分の頭で考える．客観的な観察と主体的な思考にもとづいて世界をみつめねばならない．実体のない恐怖におびえたりせず，目に見えるもの，確実に存在するものを信頼する．つまり，妖怪を恐れないということが，みずからものを考える哲学の出発点ではないかと思う．

では，なぜ哲学を学ぶことが大事なのか．なぜ人は哲学を持たねばならないのか．

埼玉県朝霞市岡 48-1　E-mail: nkiku@toyonet.toyo.ac.jp
48-1 Oka, Asaka-shi, Saitama, 351-8510, Japan

円了の時代であれば，人々はみずからの哲学を持っていなかったからではないか．誰もが昔からのしきたりどおりにするしかなかった．おかみに従うしかなかった．自由な意志を持って行動するなどということは，その時代には思いもよらなかったのではないか．

それならば現代に生きる私たちは，みずからの哲学を持っていると言えるだろうか．吹けば飛ぶような権威のまえに屈してはいないか．たとえば，流行にふりまわされるというのは，そのなかに含まれるかもしれない．

２．夜がまだ暗かった時代

井上円了は明治維新の十年前の安政五年（1858）に新潟県長岡市の真宗慈光寺で生まれた．二十三歳で東京帝国大学に入学して哲学を学んだ．時代は文明開化のまっただなかである．若い円了はとりわけ哲学の合理的な思考に惹かれた．そして合理的な思考にもとづいて身の回りのことを解き明かそうとしたわけである．身の回りのことのなかには，その時代の人々にとって妖怪のしわざにちがいないと考えられていたこと，つまりさまざまな不合理で不思議な現象も含まれていた．

円了の妖怪研究のねらいは，したがって迷信の打破であった．妖怪の存在を否定するために妖怪を研究したのである．明治近代化のなかでの啓蒙思想家としての役割を，そのような形で果たそうとしたのであった．

哲学館における講義をまとめた『妖怪学講義』が出版されている．このなかで円了がたどりついた結論のひとつは，次のようなものであった．すなわち，「世間の妖怪談中には，人の故意に作られるもの多ければ，如何に不思議らしく見えても，悉く信ずることは出来ませぬ」とある [3]．妖怪の話というのはたいてい人が故意に作ったものだから，そのまま信じてはいけないというのである．ここで注意したいのは，それでも円了は何もかもが「故意に作られるもの」だとは断じていないことである．科

学によっては解明され得ないものを，円了は別の箇所で「真怪」と呼んでいる[4]．つまり正真正銘，まごうかたなき妖怪現象のことである．そういったものがなおも存在する可能性は予想していたわけである．妖怪の撲滅に邁進した合理主義者にしてなお，人知によっては知りえないものがあることは認めていたことになる．

円了は日本全国をまわって講演をした．講演のテーマは，主催者や聴衆からの希望に応じることもあったという．哲学や教育に関するものが多いのは当然だろうが，それについで妖怪や迷信に関する内容が多かった．そのため円了は「お化け博士」とか「妖怪博士」と呼ばれたそうである．

山形県で講演を聴いた人の言葉が伝えられている．

「私は小学五年生、円了先生のお話はめずらしかった．親たちが迷信深く，夕方はさびしかった，暗くなるとこわかった．狐火，鬼火，人魂の話など，円了先生は絶対おっかないものでないと説かれた．それから大人たちのお茶飲み話でも，迷信らしいものが出ると円了先生のお話になった．私は子ども心に気持ちが明るくなった」という[5]．日が暮れてしまえば漆黒の闇夜が訪れる．子どもにとっては怖くてしかたなかった．そんな時代の雰囲気がうかがえる話ではないか．

妖怪博士の名声はやがて全国に知れわたっていく．明治二十六年（1893）のことである．石川県金沢市の郵便配達夫の家で，ポルターガイスト現象が起きた．ことの起こりは，宵のうちにといでおいた米が翌朝になって一粒もなくなっていたことだった．やがて飯櫃や擂鉢が宙を舞うようになり，鍋のなかの煮魚が飛びまわるありさまである．剃刀が上から落ちてくるかと思えば，火をともした行燈が天井に引きあげられてしまう．警官が来る。野次馬が来る．学校の生徒たちまで見物におとずれる始末だった．この珍事を報道した『都新聞』には，「怪力乱神を語らずとの教誨を守りつつある身ながら，余りの事なれば井上円了学士の説明を乞はんとす」と記されている[6]．

東海道五十三次の版画で有名な安藤広重が描いた「王子装束榎木」という作品がある．円了が生まれる一年まえの安政四年（1857）に描かれた．狐が松明を口にくわえて集まっている.こうした闇夜のあやかしの世界が，なおも人々の日常を支配していた時代であった．

同じころ西洋では心霊協会が続々と設立されている．科学万能主義が謳歌されていた時代にである．科学の可能性を人々が期待していたかげで，すでに科学に対する懐疑や不安をいだきはじめた人々もいた．やがて第一次世界大戦が勃発する．未曾有の戦死者を出してようやく終結したのち，愛する人や家族を失った人々の心を捉えたのは，亡くなった人との霊の交信であった．ヨーロッパ中を覆った悲しみの大きさのまえで，宗教はもはや慰めを与えることはできなかった．そのあげく多くの人が教会から離れてしまい，心の拠りどころを失った．そんな人々にとって，心霊主義への没頭は，いわば心の空白を埋めるものだったのかもしれない．

３．ＵＦＯは存在する

そのころから増え始めたのがＵＦＯの目撃証言である．

授業中に「みなさんのなかでＵＦＯを信じている人，手をあげて」と言うと，自信を持って即座に手をあげる学生が数人，おそるおそる手をあげるのも何人かいる．

ここで私は断言する．ＵＦＯは確実に存在する．なぜそんなことが断言できるのか．

ＵＦＯの正式名称は Unidentified Flying Object である．これはアメリカ国防総省の軍事用語である．空中を飛翔している正体未確認の物体について用いられる．軍事境界線内に得体の知れない何物かが侵入して来たら，国土防衛上そのままにはできない．まずは肉眼かレーダーで確認する．場合によっては空軍の戦闘機が出動してその正体を確認することになる．公表されているだけでも二十年間に一万件以上もあるという[7]．二十年ならば約七千日だから，一日一件以上存在することになる．もちろんそのほとんどはただちに正体が判明する．たいていは無許可の個人用ジェット機とか，異常発生した渡り鳥の大群などである．判明した段階で Identified Flying Object つまりＵＦＯではなくＩＦＯになる．これも正式な軍事用語である．しかし，いくらなんでも空を飛んでいるものの正体が，何もかもすぐに分かるわけではない．

ＩＦＯになる前段階はすべてＵＦＯである．世間を騒がせたテポドンを，ニュースでは「飛翔体」と呼んでいた．正しくはＵＦＯである．三段ロケットだということはすぐに判明したが，人工衛星の失敗作か，脅しのためのミサイルかは確認できなかったからである．先ほどのＵＦＯの名称からも明らかなとおり，もともと「空飛ぶ円盤」とか「宇宙人の乗り物」という意味はない．正体が確認される以前の飛翔体であれば，それは確実に，しかも頻繁に存在してもおかしくない．

「なんだそんなことか．これだから大学の授業はつまらない」と言い出す学生もいるにちがいない．しかし，ＵＦＯに限らず，大学という学問の場できちんと論議の対象にしようというなら，まず定義をはっきりさせることから始めねばならない．これは妖怪学においても同じことが言える。そもそも「妖怪」とは何か，という定義をきちんと行なったうえで，妖怪という言葉の範囲を共有しておくことが大切であろう．

円了は妖怪についてこう定義する.「洋の東西を論ぜず、

世の古今を問わず，宇宙物心の諸象中，普通の道理をもって解釈すべからざるものあり，これを妖怪といいあるいは不思議と称す」と[8]．つまり道理で解釈できない不思議な現象，すなわち妖怪ということになる．道理というのは筋道のある論理のことである．それは合理的な思考によって導き出されるものであろう．

さて，合理的な思考にもとづいて筋道のある論理の世界に到達すること，これはまさしく哲学が目標としているところに他ならない．哲学とは実に妖怪の正反対に位置するものである．逆に言えば，哲学の対極にあるものが不合理な思考であり，不思議な現象であり，すなわち円了先生言われるところの「妖怪」ということになる．

妖怪学といってもそこで取りあげることどもは，私たちがふつうにイメージする妖怪とはややへだたりがあろう．今の時代におそらく妖怪と聞いてすぐに思い浮かぶのは，キャラクターとしての妖怪か，古典的なところでお化け提灯や一本足の唐傘のたぐいではないか．

しかし，学問としての妖怪学の研究対象は，かならずしもこうした具体的な妖怪たちばかりではない．円了の定義にしたがえば，理性の網の目からこぼれ落ちてしまう「不思議な現象」全般である．昔ならば怪異，今ならばオカルトというのによほど近い気がする．直接には比較宗教学や精神病理学が対象とするものだが，そればかりではない．

『妖怪学講義』のなかに「降石の怪」が登場する．夜中に突然，石がバラバラと降ってくる．川崎市や長野市の実例が記されている．いわく，「これを精神の変調すなわち一種の発狂とすれば，心理学および精神病学の問題となり，これを復讐あるいは悪戯とすれば，裁判上・警察上の一問題となるべし，もしまた，その原因を人力以外の神の力に帰するときは宗教学の問題となり，物理の作用に帰するときは物理学の問題なるべし．一妖怪にして諸学に関係することかくのごとし」と[9]．

妖怪現象の解明は，人文・社会・自然のあらゆる領域からアプローチしなければならない．さまざまな学問を総動員して取り組むべき問題群ということになる．ここから円了は「妖怪学をもって全知全能の学となす」とまで述べている．「全知全能」とは振るっているが．

何かに触れたわけでもないのに，刃物で切られたような切り傷が突然現れる．これを昔は，カマイタチという妖怪のしわざと考えた．信越地方の冬にとりわけ多いという．円了の生まれた長岡はその本場であるさて，この現象をいったいどう捉えたらよいのか．カマイタチが日本海側の山間部に多いのであれば，これは地勢学・気象学・医学上の問題として考えるべきことになろうか．

４．道理を超えるもの

ＵＦＯに話を戻したい．ＵＦＯを見るのは思春期の人に多いと言われている．なぜか．

思春期には、自分の体が成長とともにどんどん変化していく．心の発達がそれについていけない．成熟した体に見合った成熟した考えをもつことができない．図体ばかりでかくても考えることは小学生みたいな大学生が最近は多くなった．私も人のことは言えないが，とにかくもここまでは発達心理学によって普通に説明できる．しかしそうした自分の内側に次々と生じてくる訳のわからない何物かにとまどうあまり，自分の外側の世界にそれを投影させてしまうことが往々にしてある．ここから先は異常心理学の領域になっていく．

ＵＦＯだけではない．超常現象に遭いやすいのも，あるいは遭ったと思い込んでしまうのも，やはり思春期に多い．学校の怪談が大はやりする年齢である．金縛りにかかるのもやはりこの時期が圧倒的に多い．

自然科学の急速な進歩によって，私たちの外側にあるもの，つまり自然に対する理解は，とてつもなく拡大した．脳という物質の研究によって，人間の心の問題まで解明できると考えている人たちさえいる．しかしそういった，何もかも科学的に説明できるという考えに反撃を加えた人たちもいた．それはかえって科学の最先端にいる人たちであった．

この世のなかには因果関係で結びついているわけではないのに，何らかの一致を彷彿させる現象がありはしないか．‥‥そういった思想の伝統は，西洋にも東洋にも古くから存在した，ミクロコスモスである人間の体にマクロコスモスである天体に存在するものすべてが備わっている，という考え方である．宇宙に星座があるように人間にもそれに対応する部位がある．宇宙のリズムは人体のリズムに影響している．そういった発想から生まれたのが占星術，今言うところの星座占いである．

５．妖怪の撲滅か保護か

円了はいまだ迷信がはびこっていた時代にあって，あくまでも実証的な精神を尊重した．迷信を打破し，妖怪を撲滅していくことに生涯をかけて努めたのである．ちなみに「迷信」という言葉は翻訳語として円了が作ったと言われている．円了は生涯をかけて哲学を研究した．そして合理的な思考をめざす哲学の，その対極にある妖怪を研究した．その本質を見極め，その撲滅を企てた．円了にとってそれは，いわば哲学者の使命に他ならなかった．

妖怪や幽霊などは迷信にすぎない．そんなものは現実には存在しない．それはそうだとしても，しかし日本人が長いあいだ妖怪や幽霊がいると信じてきたことは，まぎれもない事実である．それを信じ続けてきたということのなかに，日本人とはどんな民族か，日本の文化というものはいかなるものかを考える大事な手がかりがある．そういった視点から妖怪や幽霊の研究に真正面から取り組んでいったのが柳田國男である．

日本民俗学の開拓者である柳田國男は「迷信」という言葉は使わない．「民間信仰」という言葉を使う．人々が妖怪を信じて恐れる思いを捨て去ってしまうのではなく，なぜそんなことを考えたのか，なぜそんなものを信じてしまうのかということを知る．それこそが重要だと柳田は考えた．同じく妖怪研究を開拓したとはいえ，円了とは目指す方向が根本的に異なっていたのである．

柳田國男の全集をひもとくと，ときたま円了を批判する言葉が出てくる．はっきりと述べたところもある．「僕は井上円了さんなどに対して徹頭徹尾反対の意を表明せざるを得ない」とさえ言っている[10]．「徹頭徹尾反対」というのはなかなか厳しい．

そのころ岩手県出身の一人の青年が，東洋大学の前身である哲学館に入学した．佐々木喜善という．彼のふるさとである遠野には，さまざまな迷信や妖怪の伝説が語りつがれていた．東京には井上円了という偉い先生がいて，哲学館で妖怪学の講義をしているという．それを聴きたくてはるばる上京してきた．しかし，妖怪撲滅をめざす先生の講義にはすっかり失望してしまった．そんな折りに友人の紹介で出会った柳田國男は，彼が話す遠野の伝説におおいに関心を示してくれた．こうして佐々木喜善からの聞き書きをもとにした，あの『遠野物語』が生み出されたのである．そこには円了の名は出てこない．しかし，円了に徹頭徹尾反対するという意識のなかからこの書物が生み出され，ここから民俗学という巨大な学問が出発したことはまがいない．

６．円了妖怪学の可能性

メアリー・ノートンのファンタジー『床下の小人たち』は 1952 年に出版された．その後も書きつがれ，82 年には第五部『小人たちの新しい家』が完成した．邦訳もなされている[11]．

小人たちが人間の家の床下に住んでいる．何の魔力も持っていない．ひたすら人間の世界からの「借り暮らし」をして生きている．かつては小人たちも魔力を持っていた．それによって良きにつけ悪しきにつけ人間の世界に影響を与えてきた．しかし今では地下に追いやられて，「借り暮らし」をして生きるだけになってしまった．小人たちはこの生活がいつまで安全に続くのかと心配している．実は私たちだって，やれ自然破壊だテポドンだ第三者評価だなどと，なんらかの不安にいつもさらされている．つまり，漠然とした不安をいだき続ける小人たちの姿は，私たち人間を鏡に映した姿でもある．

小人たちが安心して暮らせる世界，それは同じように私たちだって幸せに暮らしていくことのできる社会なのではなかろうか．そしてそのことは，妖怪と人間の関係についても同じことが言えるのではないのか．妖怪がいなくなってしまった世界，つまり科学の力で何もかも解決でき，論理ですべて割り切れてしまう世界というのは，はたして人間にとって幸せな世界なのだろうか．そんなことをこの小人たちの物語を読むと感じてしまう．

井上円了が妖怪学の講義を始めてから百二十年たった今，格段に科学は進歩をとげた．しかしその時代とは次元の異なる不合理な思考や不思議な現象，すなわち妖怪はますますはびこっているのではないか．今あらためて円了妖怪学の可能性を見つめ直してみたいと思う．

参考文献

1）『井上円了妖怪学全集』全６巻，柏書房, 1999-2001.
2）『東洋大学百年史』通史編Ｉ，東洋大学井上円了記念学術センター, 1993, p.196.
3）井上円了『妖怪窟雑話』妖怪学全集第６巻, p.149.
4）井上円了『妖怪学講義』妖怪学全集第１巻, p.277.
5）『井上円了の教育理念』東洋大学井上円了記念学術センター, 1987, p.158.
6）湯本豪一『明治妖怪新聞』柏書房, 1999, p.98.
7）菊池聡『超常現象の心理学』平凡社, 1999, p.38.
8）井上円了『妖怪研究』妖怪学全集第６巻, p.369.
9）井上円了『迷信と宗教』妖怪学全集第５巻, p.272.
10）柳田國男『幽冥談』柳田國男全集第 23 巻，筑摩書房, 2006, p.649.
11）メアリー・ノートン『床下の小人たち』林容吉訳，岩波書店, 1969;『小人たちの新しい家』猪熊葉子訳，岩波書店, 1983.